



# 日本平滑筋学会ニューズレター

No.6

2012.7.26

## 第54回平滑筋学会総会開催迫る

日本平滑筋学会総会は、羽生信義会長のもと、来る8月1日から3日の日程で東京の東京慈恵会医科大学にて開催されます。羽生会長に総会に向けての抱負を伺いました。

### —総会開催を迎えて—

#### 第54回日本平滑筋学会総会

会長 羽生信義(町田市民病院・外科)

副会長 高井 章(旭川医科大学・生理学講座)

まず初めに、昨年3月に発生した東日本大震災で被災されました皆様に、心よりお見舞い申し上げます。さらに4月には第53回本学会総会会長の鎌田勝男先生(星薬科大学)と元本学会理事長の伊藤 漸先生(群馬大学)が亡くなられるという深い悲しみと衝撃を抱えました。我々の果たすべき役割は大きく、ご参加いただきます皆様とともに両先生の残された業績を受け継いでいかなければと思っております。

さて、第54回日本平滑筋学会総会の会長を拝命し、関係各位の皆様には厚くお礼申し上げます。慈恵医大関係といたしましては私が6人目になりますが、平成12年に当時の外科学講座主任教授の青木照明先生が第42回総会を主催してから12年ぶりにこのような機会をいただき、大変光栄であります。今回のテーマ「統合と進化」は平滑筋研究という壮大な課題に基礎と臨床医学者が集う横断的なユニークな本学会の存在意義と使命を再確認してさらなる発展を願うものです。

優秀演題候補口演、一般演題(口演、ポスター)には基礎の先生方から多くの演題の応募をいただきました。これにシンポジウム等の演題を加えますと基礎と臨床の演題数が丁度半数ずつになります。

第1日目の8月2日(木)は特別講演として Toku Takahashi 先生(Professor of Surgery, Medical College of Wisconsin, USA)に「Mechanism of interdigestive contractions of GI tract(空腹期消化管運動の機序)」という内容でご講演いただきます。伊藤 漸先生を偲んで「消化管運動研究の未来」と題して Zen Itoh Memorial Symposium を企画いたしました。元、前本学会理事長の東北大学内科、外科の本郷道夫先生と佐々木 巖先生にご司会いただきまして北は札幌から南は鹿児島までその分野の第一線の方々にお集まりいただきます。さらに Theo Peeters 先生(Professor emeritus, Luven University, Belgium)にも加わっていただきます。

第2日目の8月3日(金)には特別セミナーとして味の素株式会社名誉理事の鳥居邦夫先生に「食後の消化吸収と恒常性に関わる脳腸連関の仕組み」と題してご講演いただきます。基礎の先生方に負けないように臨床の先生方にも参加していただけますように教育セミナー「明日からできる消化管運動機能検査のコツと実際」を行ないます。春間 賢理事長と草野元康先生(群馬大)にご司会いただき、食道から直腸・肛門まで実臨床に即したお話をさせていただきます。一般演題の中から「平滑筋周囲細胞をめぐって」と題してミニシンポジウムを組ませていただきました。

ポスター賞はご参加いただきます皆様によって決めていただくことにいたしました。

ロンドンオリンピックが開催中の時期ですが、多くの方々にご参加いただき、実り多い学会になることを心より願っております。

発行所: 日本平滑筋学会事務局  
〒701-0192 倉敷市松島 577  
川崎医科大学消化管内科学  
TEL: 086-462-1111  
FAX: 086-462-1199  
E-mail: jsmr-adm@umin.ac.jp  
HP: http://www.soc.nii.ac.jp/jsmr  
発行責任者: 春間 賢  
編集者: 高木 都

### Contents page

*第54回総会を迎えて	
羽生信義・高井 章	1
*入会のお誘い	1
*第53回総会報告	2
第53回日本平滑筋学会総会のご報告	田中 芳夫
最優秀演題賞受賞者から	
後藤 桂	
張 影	
村上陽昭	
*平滑筋学会理事長所信	
春間 賢	3
*理事会・評議員会報告	
柴田 近	3
*平滑筋学会事務局移転のお知らせ	3
*外科医であり、基礎研究者であり、自然と生命の探求者であり、偉大な教育者でもあった元理事長の伊藤 漸先生を偲んで	
佐々木 巖	4
*リレーエッセイ第5回	
川崎 成郎	4

### 日本平滑筋学会へご入会を

本会は平滑筋に関わる基礎・臨床研究者が集う日本医学学会所属学会です。英文機関誌 Journal of Smooth Muscle Research は“IF 相当値”が3前後で国際的にも評価されています。学術集会では優秀発表を学会賞として表彰しています。皆様のご入会をお待ち申し上げます (E-mail: jsmr-adm@umin.a.jp)

## 第 53 回日本平滑筋学会総会報告

昨年 8 月 2 日から 4 日、第 53 回日本平滑筋学会総会が、故鎌田勝男会長、田中芳夫会長代理、羽生信義副会長のもと、東京都品川区の〈ゆうぼうと〉にて開催されました。本総会は、東日本大震災後の多岐にわたる混乱、鎌田会長ご逝去という困難にもかかわらず、田中会長代理や星薬科大学鎌田研究室のご尽力により、大変活発な会となりました。

総会報告を田中会長代理から、最優秀演題賞受賞の喜びの声を 3 名の受賞者から頂きました。

### —第 53 回日本平滑筋学会総会のご報告—

第 53 回日本平滑筋学会総会会長代理 東邦大学 田中芳夫

第 53 回日本平滑筋学会総会学術集会は、2011 年 8 月 3 日(水)、4 日(木)の 2 日間、〈ゆうぼうと〉にて開催されました。

本総会は、会長の星薬科大学鎌田勝雄先生が、『平滑筋を中心とする生体機能や病態の解析を出発点として、新しい治療法の開発基盤の構築を、臨床及び基礎的観点から考える機会を皆様にご提供』することを目的として開催され、2 つのシンポジウムとパネルディスカッションが企画されました。いずれも、消化管運動関連の話題がテーマでしたが、鎌田先生がプログラム集の巻頭言で述べられていましたように、今後日本の高齢化率がさらに加速されること、ストレス環境にさらされる時間がますます増大していくことなどを考えますと、消化管をはじめとした平滑筋の運動機能障害の克服は、極めて重要な課題になりますので、非常にタイムリーなものであったと思います。これに加え、ランチョンセミナーでは、セロトニン受容体を介した神経再生に関して、高木都先生(奈良県立医科大学)から、最新の研究成果をご講演いただきました。また、特別講演では、鎌田先生がご招待された Yuan 博士(イリノイ大学シカゴ校)が、肺高血圧症に関わる  $Ca^{2+}$  動員機構に関してご講演されました。

この他、一般口演に 23 題、優秀演題賞候補口演に 13 題のご応募をいただきました。この時期に、北海道から九州まで、日本全国からご応募いただけましたことは、日夜平滑筋研究に邁進されている先生方が、日本各地におられることを意味しており、その熱い思いがひしひしと感じられた次第です。演題発表後は、どの会場でも、非常に熱く、しかし、研究に対するモチベーションがさらに高められるような討論が交わされていました。熱いなかにも、和やかでゆったりとした雰囲気醸し出されているのも平滑筋学会ならではの特徴であることを再認識するとともに、また来年も是非参加したいという思いを強くしました。

本会は、会長の鎌田先生が逝去されるという極めて異例の状況下での開催でしたが、佐々木巖先生、柴田近先生、羽生信義先生をはじめ、多くの先生方、関係者の皆様から多大なるご支援、ご助言を賜りました。また、非常に困難な状況下でありながら、小林恒雄先生、田口久美子先生をはじめ、鎌田先生のご教室の皆様には、周到な準備と円滑な事務局運営をしていただきました。皆様からいただきましたご支援とご協力に対しまして、心より御礼を申し上げます。

### —最優秀演題賞受賞者からのメッセージ—

◎後藤 桂先生(奈良県立医科大学 生理学第二講座)

平滑筋研究においては未熟者の私ですが、このような名誉ある賞を頂き大変光栄に思います。今回の受賞は、偏に本学の高木教授をはじめとするスタッフ、そして共同研究者の生理学研究所鍋倉教授、加藤先生のご協力があったからであり、本当に感謝しております。本研究は、データの定量化や生理実験等で更に発展させる予定としていますので、今回の受賞を励みに更に研究に精進していく所存です。ありがとうございました。

◎張 影先生(山口大学大学院医学系研究科 生体機能分子制御学分野)

この度、第 53 回日本平滑筋学会総会において優秀演題賞をいただき、大変うれしく光栄に思います。お世話になっている研究室の小林先生をはじめたくさんの先生方のサポートをいただきましたこと、深く感謝しております。今後も引き続き頑張りたいと思います。

◎村上陽昭先生(川崎医科大学 消化器外科)

歴史ある、日本平滑筋学会より優秀演題賞をいただき、大変光栄に思っております。平井敏弘教授、松本英男講師の指導のもと、研究を続けて参りました。我々の研究が患者様に、還元できるよう、今後も消化管運動に対する研究を積み重ねていきたいと思っております。

# 平滑筋学会理事長所信

日本平滑筋学会理事長 春間 賢

川崎医科大学消化管内科学の春間 賢と申します。この度、佐々木 巖前理事長を引き継ぎ、理事長として本学会のまとめ役を担当させて頂くことになりました。本郷道夫先生、佐々木 巖先生と、臨床系、さらに消化器の分野の先生が理事長をなさっておられましたので、本学会が基礎、臨床、多分野の先生方の活動の場であるという性格上、多くの先生方と同じく私も、基礎系、あるいは消化器系以外の分野の先生が理事長を担当されるべきであると考え、昨年度の理事長選に望ませて頂きました。諸事情あり、結果的に理事長をお引き受けすることになりました。自分自身の性格上、一会員、一評議員が相応しく、歳を取りましても若い方々と一緒に研究し、学会発表し、論文を書くことが楽しく、とても学会を運営し、引っ張っていく性格ではございません。事務局引継ぎのため、東北大学の消化管外科の医局を訪ね、多くの資料を頂きました。佐々木先生をはじめ理事長を担当された多くの先生方が悩まれた、会員数の減少、会費の未納対策、会費以外の収入の確保など、多くの難問に直面しております。私が本会の入会いたしましたのは、消化管運動の研究を始めた直後よりご指導頂いておりました、藤井一元先生が1992年7月に第34回総会を広島で開催された時だと記憶しております。生理学が分からずに臨床の場で胃十二指腸運動を評価しておりました。幸い、総会での最初の発表以来、本郷道夫先生、原澤 茂先生、佐々木巖先生、伊藤 漸先生など多くの質問と指導を頂き、また、次の総会で発表し、繰り返すことにより、この分野での研究を進め、多くの論文を書くことが出来ました。2006年7月には岡山で第48回総会を担当させて頂きました。

多くの課題と取り組まねばなりません。研究の分野でお世話になり、また、活躍の場を与えて頂いている恩義ある学会です。会員の皆様の協力を得て、会の発展のため努力する所存でございます。よろしく願いいたします。

## —理事会・評議員会報告—

前日本平滑筋学会事務局、柴田 近

昨年8月2日に開催されました理事会・評議員会について報告致します。一昨年度の収支報告が春間財務委員長からなされ、次年度繰越金は一昨年とほぼ同様で財政状況が悪化している訳ではないが、それは時限付きの寄付金収入のおかげであることが報告されました。寄付金が本年度で終了になることを考えますと、健全財政維持には支出を削減するか方法はなさそうです(これは昨年の理事会でも話題にしました)。最大支出は会誌印刷費であり、その削減には会誌の完全オンライン化が有効と思われます。英文誌はすでにオンライン化されており、現在和文誌のオンライン化も進行中であることが鈴木光編集長から報告されました。英和文誌双方のオンライン化実現時に会誌印刷をやめればかなりの支出削減となりますが、学会演題抄録集の印刷等の問題も残っています。会誌印刷廃止の方向で検討し、可能であれば来年の総会までに結論を出すことになりました。また、平滑筋の教科書を出版して学会の活性化につなげる案が昨年から出されており、今後も引き続き検討を行なうことになりました。今年佐々木前理事長の任期が切れるため理事長選挙が行なわれ、理事会を欠席されていた福岡大学の瓦林達比古先生が新理事長に選出されました(その後、瓦林先生は理事長職を固辞され、理事会で協議の結果、次点の春間理事が新理事長に選出されました)。評議員会では新基礎系理事2名の選挙が行なわれ、東京大学の尾崎博先生と名古屋市立大学の山本喜通先生が選出されました。尾崎理事選出に伴い欠員となりました監事には山口大学の小林誠先生が選出されました。また、第54回総会副会長に旭川医科大学の高井章先生が選出されました。佐々木理事長退任に伴い事務局も昨年10月に川崎医科大学に移動致しました。この4年間、皆様方のご協力にも支えられ、どうにか事務局を務めることが出来ました。厚く御礼申し上げますと共に、多々至らぬ点がありましたこと、この場をかりましてお詫び申し上げます。

## —日本平滑筋学会事務局移転のお知らせ—

日本平滑筋学会事務局は、春間理事長就任に伴い、東北大学病院・胃腸外科から川崎医科大学・消化管内科内へ移転いたしました。新しい事務局住所・連絡先は以下の通りです。

〒701-0192 岡山県倉敷市 松島 577 川崎医科大学消化管内科学内  
TEL. 086-462-1111 FAX. 086-462-1199 E-mail. jsmr-adm@umin.a.jp

## 外科医であり、基礎研究者であり、自然と生命の探求者であり、偉大な教育者でもあった 元理事長の伊藤 漸先生を偲んで

前理事長 佐々木 巖

伊藤 漸先生は東京生まれの江戸っ子育ちで、大学は東北大学理学部に入学されて暫しの間、仙台で学生時代を過ごされた。先生は理学部から医学部への転向を考え、山登りが趣味のこともあって日本アルプスに近い群馬大学医学部に転入され群馬大学医学部を卒業されている。米国チューレン大学に留学されて胃酸分泌を中心とする消化管生理学を研鑽された後、外科医の立場で基礎研究をしておられた。小生がセクレチンに関する学位の研究成果を日本消化器病学会のシンポジウムで発表した折に、先生は犬で十二指腸にPHセンサーを挿入して得られたPH変化とセクレチン分泌の相関についてきれいなデータを示しておられた。先生の実験手段の中心が犬を用いた研究であることから先輩外科医として勝手に親近感を感じていた次第である。その後、先生は自らの工作で作り上げたストレンゲートランスジューサー装置を駆使して、犬の意識下における消化管運動に関する多くのオリジナルな研究成果を世に発表された。そして、実験中に手術した犬の感染予防にテトラサイクリンを投与した時に嘔吐を誘発することに気づき消化管運動亢進作用がある事を発見された。その後、Motilinとモチライドの研究に発展させて消化管運動の基礎研究に世界的に大きな足跡を残されたことは周知のことである。世界の研究者が認めることとなり1997年に神戸市で International Symposium : Three Decade of Advances in Gastrointestinal Motility が伊藤先生の会長の下で開催された。懇親会の出し物は阿波踊りで、先頭を切って先生が踊りに加わり、世界からのゲストを心から歓迎しておられた笑顔の思い出。1990年6月には軽井沢で第32回学会を主催され、1997年から2001まで本学会理事長としてもご活躍されている。日本平滑筋学会を今日まで育てられ国際レベルに発展させた大の恩人でもある。

平成元年に教授室を訪ねた時に、チョウチョの標本が飾ってあるのを発見。先生が子供時代からいわゆる「蝶屋」である事が判明した瞬間であった。米国臨床医療の父とされるWilliam Oslerも伊藤先生と同様に昆虫採集が趣味で、幼少から観察力が磨かれた事を聞き及んでいたため、この時から伊藤先生とOsler教授とをダブらせて思うようになった。

先生は外科医としての先輩でもあるが、常に広い科学的視点から我々後輩を指導下さった。多くの基礎研究成果がある中で実学として臨床に活かされることが重要である…と、我々後輩に熱く語っておられた。基礎と臨床のコラボレーションを図る本学会を大切にされていた理由もそこにあったと思われる。

先生の研究への熱情には晩年というものが無かったように思う。群馬大学生体調節研究所長を退官される時に「胃は悩んでいる」の著書を岩波新書から出版されている。退官されてからは群馬の山郷に住居を構えてこれからは期待される若い研究者を集めて定期的に「伊藤塾」なる勉強会を開催しておられた。そして何時も後輩や弟子達のことを大変面倒をみて、心配して下さいました。今年こそ小生も時間を作り参加したいと考えていたが、余りにも早く天国へ旅立たれてしまった。あの屈強で努力を惜しまず、そして全国どこからでも思いついたら電話連絡を下さった先生が既にこの世に居ない寂しさを感じる。先生の思い出は紙面には書ききれないほどである。

最後に本学会の発展に大きな功績を残された先生に心から感謝を申し上げる共に、ご冥福をお祈り申し上げます次第である。

## リレーエッセイ第5回 「高齢化社会と平滑筋研究」

国際医療福祉大学 川崎成郎

平滑筋学会との出会いは大学を卒業して3年ほどたった頃なので、15年以上が過ぎたことになる。今さらではあるが、平滑筋学会は多様な専門家が集まっており、自分の専門以外の事からいろいろなヒントをもらえる学会であり、たいへんお世話になってきた。私は、これまで一貫して人間や動物の個体生理学を研究し、臨床で遭遇する現象を理論付けてきたつもりである。また、臨床で疑問に思ったことを動物実験で再現し、臨床に還元してきた。

先日、ある学会で胃瘻からの栄養投与継続の是非に関するシンポジウムがあった。意識がしっかりしていない終末期の患者に胃瘻から栄養することは、安らかな死を迎えるには障害になるという内容だった。亡くなっていく過程を長くするだけであるということだった。胃瘻から水分や栄養物を補給しても、それが本人のためになるかどうかは分からない。そのような時には、胃瘻からの栄養や補液を中止すべきとの意見も聞かれた。

脳と腸は自律神経で強く結ばれており、強く相互に影響を与え合う。これが脳腸相関であり、平滑筋研究に大きな影響を与えている。消化器外科の臨床では、術後早期から消化管を使用することで、小腸免疫の活性化などによって全身状態を保つことができる。消化器外科医にとっての脳腸相関は、術後の消化管機能を少しでも早く元に戻し、麻酔で眠った脳を元気にさせることである。消化管を刺激することで、脳も活性化すると考えているわけである。しかし、生命の終末期の脳と腸はいつか相関することがなくなってしまう。いくら腸を使っても脳が刺激されることがなくなる日が必ずやってくる。脳の機能が廃絶されたとしても、比較的原始的な臓器である消化管は水分や栄養が補給されれば動くことが可能であるが、それが本人や推移にとって有益かどうかは誰にも分からない。一番の問題は本人から苦痛の有無を確認することが極めて困難である場合がほとんどであるためである。今後はこのような患者を前にすることは多くなることだろう。施設ごとに対応も異なってくると考えられる。

口から食べられなくなったらどうするか。現状は個々の判断に任されている。胃瘻患者は日本全国で40万人以上である。当然ではあるが、元気な人や治療を受けて元気になる人の消化管機能がばかりに目が向いていた。これからは終末期の消化管機能とその管理についても考えていく必要があるのではないだろうか。